

君の声と私の耳

岐阜県立岐阜聾学校 中学部3年 奥野 柚穂

「奥野さんは耳が聞こえにくいから…」

きっとこの言葉は、この14年間の中で一番多くかけられた言葉なのだと思う。私は、数ある言葉の中でこの言葉が大嫌いだ。この言葉のせいで、私はできる事が限られてしまった。

私は小2の時までは、聴こえない事を全く気にしていなかった。そして、歌う事が大好きで、誰よりも大きな声で歌っていた。学校の先生にもほめられていて、何よりも心のモヤモヤが無くなっていくのが気持ちよかった。しかし、小2の時クラスメイトから、

「お前の歌はヘタクソ」

と言われた言葉が心に突き刺さった。目の前が真っ暗になった感じがした事は今でも覚えている。私は家に帰ってすぐお母さんに、わんわんと泣きついた。するとお母さんは、

「柚穂は耳が聴こえないんだもん。だから音がずれるんだよ」

と優しく言ってくれた。その時、私はやっと耳が聴こえない事がどれだけ重要だったのかに気付いた。友達の話す口がどれだけ小さくても、何とか聞き取れているし、早口な先生の言葉も分かる私にとっては、それはすごく心を揺さぶられた。それからは、耳が聴こえないから…と友達に変な目で見られたり、自分も友達との間に壁を作ったりして、孤立をしていた。それに悩んでいた私は、小学6年生の時に通っていた「きこえの教室」という所の先生から岐阜聾学校を勧められた。きこえの教室には、私と同じ聴覚障がい者の友達がたくさん通っていた。そして岐阜聾学校に進学していく先輩もいた。私は聾学校に通うのを最初は反対していた。友達と一緒に普通中学に行きたかったからだ。それに、その時に先生から言われた言葉が一番の反対する理由だった。

「柚穂さんは耳が聴こえにくいから、聾学校に行ったらどう？」

という言葉だった。私は、耳が聴こえにくいからって何なんだ、何でそれだけで進路や中学も限られなきゃいけないんだ、と納得がいかなかった。でも、お母さんに引っ張られて見学だけでも…と思いながら、岐阜聾学校を訪れた。岐阜聾学校の生徒は、自分が耳が聴こえない事を気にせず、楽しそうに過ごしていた。私はその様子を見て、凄く感動をした。こんなにも、耳が聴こえない事を気にしなくていい学校は他にない、と思った。

中学1年生。私は岐阜聾学校の生徒になった。先生方の話も分かりやすく、友達と楽しく話が出来るのがとても嬉しかった。そして誰もが「聞こえないん

だから…」と言わなかった。私は中学をここにして本当に良かった、と思っている。

岐阜聾学校は、中学部と高等部に分かれている。私は、普通高校にはあまり行く気にはならなかった。また耳が聴こえないことを言われそうな気がして、それが怖かった。先生からも普通高校を受けたら良い、と言われたけど、少し不安もあった。

ところが、今年の夏に加納高校に聴覚障がい者が居る、ということを知ったのだ。加納高校に見学に行ったときに、その人は友達からいろんな情報をもたらしたりなど、いろんな人に囲まれていた。その人は、聴こえないことと戦っているかの様にも見えた。私は、このままだと耳が聴こえない、という障がいに甘えてしまうような気がした。自分の限界を作ってしまうような気がした。私は、今普通高校を目指して受験勉強をしている。塾の先生の話は少し難しくてくじけてしまいそうになりながらも何とか持ちこたえている。

私は、聴覚障がい者に生まれたことを少しも後悔をしていない。寧ろ、自分と向き合えることを教えてくれた武器だと私は信じている。私は音が聴こえにくくても、人の気持ちを汲みとれるような人になりたいと思う。また、その為には私たち障がい者と向き合って、おたがいの声を通じ合えたら、すごく嬉しい気分になれると思う。今、私たちは自分の声が健聴者にも届けば良いなと願っている。